

■研究・実践の課題（テーマ）

大学生における歯科保健行動に関する研究

—子どもケア学科・管理栄養学科・映像メディア学科・看護学科との比較研究—

■主任研究者 浅野妙子

■共同研究者 松下英二、岡田君江、梶田沙希、加藤美奈子

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【目的】

大学生の歯科保健行動は、高校までの歯科保健学習を除いた生活習慣や家庭教育が大きく関与していると推定される。そこで本研究では、各専門領域を専攻する学部生を対象として、歯科保健行動や習慣、審美性に関する意識の実態を調査分析し、大学での専門的な教育や体験が、現在の歯科口腔保健行動にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

調査対象は N 大学に在籍する女子大学生 440 名であり、管理栄養学科、映像メディア学科、看護学科、子供ケア学科養護教諭コースおよび子どもケア学科幼児保育専攻の学生に対し、2018 年 12 月に自記式のアンケート調査を実施した。調査内容は年齢および歯科口腔保健行動に関する調査として、現在の口腔清掃行動、歯科受診・受療行動、審美性を調査した。

【結果】

大学において口腔清掃行動について学んだ者の歯科口腔保健全般への興味・関心が約 10% 高いこと、歯科受診・受療行動および審美性について学んだ者の歯科口腔保健全般および口腔清掃行動、歯科受診・受療行動、審美性に関する興味・関心が約 10～15% 高いことが明らかになった。現在の歯科受診・受療行動では「かかりつけ医」がある者の割合と口腔清掃行動の学習、「異常時歯科受診」を行う者の割合と歯科受診・受療行動の学習がそれぞれ関連しており、どちらも学習している者の方の割合が約 10% 高いことが明らかとなった。また、審美性において「歯の色の改善行動」を行っている者の割合と、歯科受診・受療行動および審美性の学習が関連していることが明らかとなった。

【考察】

大学での歯科口腔保健教育は、大学生の歯科口腔保健に関する興味・関心と関連するが、現在の口腔清掃行動や歯科受診・受療行動とあまり関係しないことから、歯磨きや歯科受診は大学入学前までの教育や習慣が関与していると考えられる。また、大学生に対して歯科口腔保健教育を行う場合、審美性に関する学習が行動変容に効果的であると考えられる。